

葦屋のさとしるよしゝて（承前）

葦屋のさとしるよしゝて（承前）

——伊勢物語のあそび——

上野 英 二

四

『伊勢物語』八七段の男達は、何らかの「憂さ」を抱えて葦屋に「遊」んだ。「家の前の海のとりに遊び歩き」、「布引の滝見」にうち興じた。

しかし、彼等の「憂さ」はそれで晴れたのであろうか。

同じく、「憂き世」の都を余所に、水無瀬、交野に出遊し、「狩」に、「酒」に、「歌」に興じた『伊勢物語』八二段の男達の楽しみは、それ等に留まるものではなかった。

私見によれば、八二段の男達の大きな楽しみは、女との出会い、具体的にはその周辺、「河陽」に集散した

「銜壳^ニ女色^一者」(大江以言「見^ニ遊女^一」)、すなわち遊女との交会にあつたらしい(拙稿「伊勢物語のあそび」『文学季刊』第一〇巻第四号)。

大江匡房「遊女記」にも「雲客風人、為^レ賞^ニ遊女^一、自^ニ京洛^一向^ニ河陽^一」とあつて、都の貴族達は、一面で遊女と出会うために「河陽」に「遊」んだもののようだ。

八二段、

狩り暮らし棚機つ女に宿借らむ天の川原に我は来にけり

「棚機つ女」は、遊女を当地「天の川」の因みで寓意したものであつたろう。「憂き世」の「憂き」は、女との出会いによつて慰められることが大きかつたのではないか。「貴族のみやびな生活様式の一環」(目崎徳衛「在原業平」『日本詩人選在原業平・小野小町』)には、女との出会いを加えなければならないであらう。

実際、『伊勢物語』八二段、八七段等を襲うかたちで、交野、吉野宮滝、住吉を巡歴した宇多上皇の出遊においても、その宴席に遊女が侍つたこと、『競狩記』に見えて⁽¹⁾いる。すなわちその初日の宿所「赤日御廐」において、「又遊女数人入来在^レ座」とあつた。

八七段、葦屋出遊の場合は如何であらうか。

差し当り、八七段に「遊女」が出現したという形跡は見当らない。しかし、この段においても「女」は登場している。

その夜、南の風吹きて、浪いと高し。つとめて、その家のめのこども出で、浮海松の浪に寄せられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。女方より、その海松を高坏に盛りて、柏を覆ひて出したる、柏に書けり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり

田舎人の歌にては、余れりや、足らずや。

すなわち、「その家のめのこども」、「女方」。これらの「女」は男とどうかかわったのか。

「その家のめのこども」という「家」が、『比古婆衣』の言うような「浦人などの如きいやしき家」ではなく、男の別荘であつたと考えるべきこと、すでに述べた（葦屋のさとしるよし、て——伊勢物語のあそび——）『成城国文学論集』第三十一輯）。従つて、この「めのこども」は、男が「宿っている知人の家」の「召使いの女子ども」（竹岡正夫『伊勢物語全評釈』）ではない。男の葦屋の別荘に所属していた「召使いの女子ども」と考えるべきであらう。男が「主」たる葦屋の「家」には、少なからぬ「めのこ」が召使いとして用意されていた。「女方」とは、それらの「召使いの女子ども」を含み、さらにそれを束ねるべき女、あるいは女達の存在を示唆するであらう。この別荘には、女性達による一種の奥向きの組織と云うべきものがあつたのである。そうした「女方」から男へ、海松と「わたつみの」の歌が届けられる。それを差配した人物、すなわち本文に言う「田舎人」こそは、その「女方」の主人と云うべき女性であつたであらう。「わたつみの」の歌を詠んだであらう女性、男の別荘たる、この「家」に所属する使用人の女達を束ねる、女主人とも云うべき存在の女性であつたはずである。

男の別荘にあつて、男の世話を率先してする、この「田舎人」。それは男の「いわゆる現地妻」なのではなかつたか。⁽²⁾「主人公の妻は正妻ではなく、いわゆる現地妻だつたのである」（片桐洋一『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』）。

とすれば、少くとも主人公の男の八二段の葦屋出遊の目的の一に女との出会いがあったこと、十分に考えられることになる。

すでに『伊勢物語』には、「昔、男、津の国菟原の郡に通ひける女」、という話も見えている。

昔、男、津の国菟原の郡に通ひける女、このたび行きては、

または来じと思へるけしきなれば、男、

葦屋より満ちくる潮のいやましに君に心を思ひますかな

返し、

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき

田舎人のことにては、よしや、あしや。

(三三段)

この「女」が八七段の「現地妻」と同一人物か否か、にわかには判断できないけれども、この段においても、男が「津の国菟原の郡」で女を作っていたことからすれば、八七段でも同様なことがあっても不思議ではないだろう。三三段結語「田舎人のことにては、よしや、あしや」は、八七段「田舎人の歌にては、余れりや、足らずや」と変わるところが無い。男に歌を贈った「女」は、ともに「田舎人」と呼ばれている。三三段「よしや、あしや」の「あしや」には、「葦屋」が隠されているのではないかとさえ勘繰りたくもなる。

それはいずれにもせよ、出遊の男達がその出先の女によって「憂さ」を慰めようとしたことは、まああったことと理解しなくてはならないだろう。

その典型は、他ならぬ八七段「この男のこのかみ」「衛府督」、業平の兄、在原行平の逸事として伝えられてい

る、能の『松風』（『松風村雨』）の物語である。

これは過つる夕暮に、あの松陰の苔の下、亡き跡問はれ参らせつる、松風村雨二人の女の幽霊これまで来たりたり、さても行平三年が程、御つれづれの御舟あそび、月に心は須磨の浦、夜汐を運ぶ海人乙女に、おとゝひ選ばれ参らせつゝ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るゝ須磨の海人の、塩焼衣色替へて、縑の衣の、空薫也、かくて三年も過ぎ行けば、行平都に上り給ひ、幾程なくて世を早う、去り給ひぬと聞きしより、あら恋しやさるにても、又いつの世の音づれを、松風も村雨も袖のみ濡れてよしなやな、身にも及ばぬ恋をさへ、須磨の余りに罪深し跡と弔ひてたび給へ、

『古今和歌集』にもあるように、在原行平には「事に当りて」「津の国須磨といふ所」に引き籠ることがあった。

田村の御時に、事に当りて津の国須磨といふ所に籠り侍りけるに、宮の内に侍りける人に遣はしける

在原行平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつゝわぶと答へよ

（『古今和歌集』卷十八 雑歌下 九六二）

その間、行平は当地の「汐汲海人」の姉妹、松風、村雨に情を懸けることがあった、と言う。

行平ばかりではない。行平の右の事蹟をそのままなぞるように須磨に退居した『源氏物語』の光源氏。彼もまた、出先で「いわゆる現地妻」を設けるている。すなわち明石の上である。

幸か不幸か、彼等の出先に正妻は同道しない。とすれば、「いわゆる現地妻」というのも、自然の成り行きで

あつたろう。

謡曲『松風』の伝えが事実に基づくという確証はもとより無い。『源氏物語』に至っては、フィクションではない。しかし、片や業平の実の兄、片や「好色の方は、道の先達なるが故に在中将の風をまねびて」という光源氏（『河海抄』）である。業平に「いわゆる現地妻」があつたという蓋然性は大いにあつたとしなければならぬいだらう。

五

『伊勢物語』八七段の男が、「葦屋のさと」の「家」に、「いわゆる現地妻」を置いていたとして、では、その「現地妻」とは一体如何なる女性であつたろうか。

本文に「田舎人」とある以上、それは都の女性ではなかった。それは言葉通り、「現地」の女であつたろう。「現地」の女性とすれば、どう考えるべきか。

ここで再び、「遊び歩き」の男が「布引の滝見」の行樂を終えた帰途、「家」を望んで詠んだ「はる、夜の」の歌に着目する必要がある。

帰り来る道遠くて、亡せにし宮内卿もちよしが家の前来るに日暮れぬ。宿りの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かの主の男詠む。

はる、夜の星か川辺の螢かもわが住むかたの海人のたく火か

都の男には珍しかったであろう、海辺の夜景を詠んだ歌だが、この歌に詠まれた「わが住むかたの海人」というのが、男の「いわゆる現地妻」なのではなかったろうか。

すでに、一日遊び暮らして、早、日も暮れた。しかし、なお「帰り来る道遠くて」と言う。道は夜道になったであろう。「亡せにし宮内卿もちよしが家」を見て、男の里心にはわかには騒いだのではない。そうして、その「家」、「宿りの方を見やれば」ということになったのではないか。とするならば、歌に詠まれた「わが住むかたの海人」とは、その「家」の女主人、「いわゆる現地妻」ということになる。

彼女は、「海人」であつたのではないか。

八七段、男の「現地妻」は海女であつた。そう言えば、それは余りに奇矯な説と聞こえるかも知れない。けれども、兄行平、『松風』の「現地妻」、松風村雨の姉妹は、「夜汐を運ぶ海人乙女」だつたではないか。業平も行平も、現地の海辺に働く海女を、「現地妻」として見染めたものではなかつたか。

海女が漁火を焚くことは、すでに『萬葉集』にも見えている。

海人乙女いざり焚く火のおぼほしく角の松原思ほゆるかも

（巻第十七 三八九九）

勿論、この夜、この「現地妻」が実際に漁火を焚いている必要は毛頭無い。それは言葉のあや、文学的想像力の所産であつて一向に構わない。ただここでは、この「現地妻」が海女の出身であつた蓋然性が確認できれば、それでよいのである。

ここで、改めて八七段冒頭「葦屋のさと」が、

昔の歌に、

葦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさゝず来にけり

と詠みけるぞ、このさとを詠みける。こゝをなむ葦屋の灘とは言ひける。

と紹介されていたことが想い合わされるであろう。

「葦屋のさと」とは、耳馴れない地名であるかも知れませんが、この古歌で御了解いただけるでしょう…。八七段は、こうしてこの歌を引いて物語の舞台「葦屋のさと」を紹介する。

その、証歌とも言うべきこの歌こそは、海女の詠じたものであったと考えられるのである。「塩焼き」、「黄楊の小櫛」、「さゝ（ず来にけり）」そこには、「塩焼き」の海女の姿が確かに髣髴とする。果して『松風』の詞章にも、「月こそさはれ葦の屋、灘の汐汲む憂き身ぞと、人にや誰も黄楊の小櫛、さしくる汐を汲み分けて」と、この歌が引かれていた。

『伊勢物語』八七段冒頭に置かれたこの歌は、後の「海人」の登場を予告するものではなかったろうか。

この歌について、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』は、その本歌として、『萬葉集』の歌を示して、次のように言う。

◇石川少郎歌一首

然之海人者 軍布苧塩焼 無暇 髪梳乃小櫛取毛不見久尔

（万葉・二七八）

本段の歌も右万葉の歌と同様に、塩焼く仕事之余りに忙しくて、女の身だしなみ、黄楊の小櫛で髪をくしけずって装ったりしている暇もなくやって来たという意で、衝動的な恋しさに、つい男のもとに逢いに来てしまった、切なる恋の歌と解される。

この歌は、「塩焼く仕事之余りに忙し」い海女の「衝動的な恋しさ」を歌った、「切なる恋の歌と解される」。
『伊勢物語』八七段は、物語が展開される「葦屋のさと」を、そういう、海女の「切なる恋」の舞台として呈示していると解すべきであろう。そういう「葦屋のさと」であつてみれば、そこで海女との恋が予感されるというのも、むしろ当然のことと言うべきではないか。

海女と都の貴人との恋。

海士人の恋とは、大職冠、行平も、磯に見る目の汐なれ衣、

「海士人の恋」と言えば、「大職冠」と「行平」に指を屈する、と言う。

「行平」はすでに述べたように、謡曲『松風』に詳しい。「大職冠」は幸若『大職冠』、謡曲『海士』の語るところである。「淡海公」藤原不比等（『大職冠』では藤原鎌足）は、「大臣御身をやつしこの浦に下り給ひ、賤しき海人乙女と契りをこめ、一人の御子を設く」（『海士』）。いわゆる讃岐志度寺の縁起である。この場合は、竜宮に取られた重宝「明珠」を探索するための計略であつたろうから、それを「いわゆる現地妻」とは言い難いけれども、都の貴人と海女との間に恋が有り得たことの、これも一の証左となるだろう。

それはさて置き、ここで重要なのは、「海士人の恋」というものが取り立てて述べられている点である。

引用は、近松門左衛門の浄瑠璃『平家女護島』二段目、世に「俊寛」として親しまれる段の一節である。

時は平家全盛の時代、謀反の疑いによつて「俊寛僧都」「丹波少将成経」「平判官康頼」は鬼界が島へ流されるが、「海士の恋にむすばれ、妻を設け給ひし」。やがて成経には「いわゆる現地妻」が出来る。それが「海士人の恋」なのであった。

少将殿こそやさしき海士の恋にむすばれ、妻を設け給ひしと言ふより僧都莞爾と、珍らしく、配所三歳が人間のうへにも我がうへにも、恋といふ字の聞き始め笑ひ顔も是始め、殊更海士人の恋とは大職冠、行平も、磯に見る目の汐なれ衣、ぬれ始めは何とく、俊寛も古郷にあづまやといふ女房明けくれ思ひしたへば、夫婦の中も恋同然、かたるも恋聞くも恋、聞きたしく語り給へとせめられて、顔も赤むる丹波の少将、三人互ひの身の上をつゝむにはあらねども、数ならぬ海士の茶船押し出して、恋と申すも恥づかしながら、なかゝる辺国波島まで誰が踏み分けし恋の道、あの桐島の漁父が娘千鳥といふ女、世のいとなみの塩衣、汲むも焼くもそれはまだ浜辺のわざ、そりや時ぞと夕波にかはいや女の丸裸、腰に浮け桶手には鎌、千尋の底の波間を分けてみるめ刈る、若布荒布あられもない裸身に、鰭がぬら付くばらがこそぐるがざみがつめる、餌かと思つて小鯛が乳にくひ付くやら、腰の一重が波にひたれてはだへも見えすく、壺かと思ひ蜻蛉が臍をかゝう、浮きぬ沈みぬ浮世渡り、人魚の泳ぐもかくやらん、汐干になれば洲崎の砂の腰だけ、跟には蛤ふみ、太股に蚌はさみ、指ではおこせば爪は蠣貝ばいのふた、海人の逆手を打ちやすみ黄楊の小櫛も取る間なく、螺のしりのぐるぐわげも縁ある目からは玉かづら、かゝる島へもいつの間に、むすぶの神の影向か、俊寛に問いつめられて成経は、「数ならぬ海士の茶船押し出して、恋と申すも恥づかしながら」と、「漁父が娘千鳥といふ女」との馴れ染めを語り出す。「辺国波島まで誰が踏み分けし恋の道」、恋が所を扒ぶはずもなく、成

経は配所鬼界が島で「海士人の恋」に落ちたのだった。

以下、海女「千鳥といふ女」の魅力が並べ立てられる。「世のいとなみの塩衣の、汲むも焼くも」というのは、そのまま能の『松風』、「いざ／＼汐を汲まむとて、汀に満ち干の塩衣の」という海女の姿に通うであろう。しかし、「それはまだ浜辺のわざ」、成経はさらに千鳥の魅力を語り続けた。「腰に浮け桶手には鎌、千尋の底の波間を分けてみるめ刈る」とは、潜水して貝や海藻を採る海女の姿。「かはいや女の丸裸」、「若布荒布あられもない裸身に」、成経が男心を動かさないはずもなかった。成経の語りは留まること無く、「小鯛が乳にくひ付くやら」、「腰の一重が波にひたれてはだへも見えずく」……と、次第に直接的になつて行く。

こうした女に巡り会ったとすれば、現地の海女と恋に落ちるというのも宜なる哉と言うべきだろう。まして流人とは言え、成経は都の貴人、見なれぬ海女の健康的な裸身は、一汐魅力的に映ったことであろう。⁽³⁾

前稿に引いた『うつほ物語』吹上上「渚の院」での海女の製塩見物等にも、そうした興味が無かつたとは言えないだろう。

都人の海女への関心は、古く『萬葉集』にも見えている。

三年丙寅の秋九月十五日、播磨国の印南郡に幸したま

ひし時に、笠朝臣金村の作りし歌一首 短歌を并せたり

名寸隅の 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝風に 玉藻刈りつつ 夕風に 藻塩焼きつつ 海人娘子
ありとは聞けど 見に行かむ よしのなければ ますらをの 心はなしに たわやめの 思ひたわみて た
もとほり 我はそ恋ふる 船楫をなみ

反歌二首

玉藻刈る海人乙女ども見に行かむ船梶もがも波高くとも
行き巡り見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波

(巻第六 九三五―九三七)

「おそらく貴族たちは、健康ではちきれそうな裸の海人に娘に、好奇的な欲情をおぼえたのであろう。旅のつれづれをなくさめる恋愛遊び。中には、本気で海人の娘に恋した貴族があつたかもしれないが、それは旅の間だけ。あとには能の「海人」のような悲劇が残つて、貴族は都に帰るのであろう」(梅原猛『さまよえる歌集 赤人の世界』)。

この指摘は、この限りで恐らく当を得たものであろう。

「能の「海人」のような悲劇」とは、能の『海士』に語られる、竜宮に玉を奪われた藤原不比等がこれを取り返すために、「いやしき海士乙女と契りをこめ」、その命と引き替えに玉を奪還させたことを言うが、右に言われるようなことが、八七段の男にも有り得たであろうことは、想像に難くない。

それは、『松風』の行平にも、「俊寛」の成経にも、同様に言い得ることであらう。

果たして、『平家女護島』も『松風』同様、

海人の逆手を打ちやすみ黄楊の小櫛を取る間なく

と、八七段冒頭に引かれた、

葦の屋の難の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさ、ず来にけり

の歌を、その詞章に引用していた。

六

『伊勢物語』 八七段の男に「いわゆる現地妻」があつたとして、さらにそれが海女であつたとして、そうした女がこの男の心をどれだけ捉えることができたであろう。ことに、この男は歌詠みを以って任ずる。八七段末尾には、その女の歌と目される「わたつみの」の詠が載せられているが、この男の眼鏡に叶うような歌が、一介の海女に詠めたものであろうか。

『撰集抄』は、業平の兄行平と須磨の「海士人の恋」を語る、謡曲『松風』の一の原拠となつたであろう伝承を伝えている。

第一 行平絵島ノ海人歌ノ事

昔、行平の中納言と云ふ人いまぞかりける。身にあやまつ事侍りて、須磨の浦に遷されて、藻塩垂れつ、浦伝ひなどし歩き給ひけるに、絵島の浦にてかづきする海人の中に、よに心の止まり侍りけるに、たどりやりて給ひて、「いづくにや住みする人にか」と尋ね給ふに、この海人とりあへず、

白波のよするなぎさに世をすごす海人の子なれば宿もさだめず

と詠みてまぎれぬ。中納言、いとゝかなしう覚えて、涙だもかきあへずとなん。

波のよるひるかづきして、月宿れとは濡れねども、心ありける袂かな。波になみしく袖の上には、月ぞ重

ぬるなれし面影、その濡れ衣を片敷き、舟の内にて世を送る海人部の内にも、かゝる情の侍る類も侍りけりとおぼえて、ことにあはれに侍り。歌まことに優に侍り。

『撰集抄』において、行平の「現地妻」は、行平の「いづくにや住みする人にか」という問いかけに、一首の歌で答えたと言う。「歌まことに優に侍り」。その歌の出来栄えに行平も感じ入ったと言う。「舟の内にて世を送る海人部の内にも、かゝる情の侍る類も侍りけりとおぼえて、ことにあはれに侍り」。

悔る勿れ、海女の中にも歌に通ずる才芸を持った者がいたのであった。

だが、この海女が行平に答えたと言う「白波の」の歌が、この海女の自作であったかは定かではない。と言うのも、この歌は『倭漢朗詠集』にも載る、人口に膾炙した歌であったからである。行平の問いかけに、この海女はかねて聞き知っていたこの歌を口にするので、咄嗟に応じようとしたのかも知れない。

ただ、ここで注意すべきは、この歌が古来遊女の歌とされた点である。『朗詠集』は、この歌を巻下、「遊女」の部に収め、作者を「海人詠」とする。

すなわち、この歌は、「遊女」たる「海人」の詠とされていたのである。とすれば、『撰集抄』において行平の相手となって「白波の」の歌を詠じた「海人」は、遊女であったという蓋然性が出てくることになる。遊女であれば歌を詠むのもお手の物であろう。

八七段の「海人」も遊女なのではなかったか。⁽⁴⁾

海女が、しばしば遊女でもあった歴史のあったであろうことは、柳田国男「海人部史のエチュウド」の示唆するところでもある。⁽⁵⁾

広東の珠江の水に浮んで居る数千艘の蜑民の船には、日本の中世の江口河尻の生活を想ひ起さしむる者が多かつた。彼等の中には流に溯つて遠く韶州の城外に至つて仮泊し、尚煙花のなりはひに携る者さへあつた。恰かも妙女白女の徒が山崎鳥羽のあたりに迄棹さして、貴人の遊を迎へたのと同じである。定家卿の日記などを見ると、遊女には陸に上つて家居する者もあつた。南支那の蜑家が命終つて後漸く堅い土に睡ることを許されるのに比べると、誠に頼みある境遇のやうだが、しかもそれは唯艶にして善く歌舞する者のみの特権であつて、年老い色衰へて後は親夫に誘はれ、再び漂泊の船に上らなければならなかつたのである。故に或時には絶代の佳人の、能く其才芸を以て天が下の詞客を魅し尽し、意満ち氣驕りてあるべき者までが、尚肅然として浜千鳥の一章を口吟したのである。

浜千鳥飛ゆく限ありければ雲ある山をあはとこそ見れ

此歌の哀音は海部千年の寂しい歴史を、理解する者の胸には沁み入つたであらう。千鳥でさへも末は落着く浜がある。遊行の女婦は一生をうかれあるいて、何処で果てるといふ宛ても無い。あの山に居る雲の如く、見る／＼行き動くが心細いと言つたのは、即ち後世の小唄の、「ちぎれ／＼のあの雲見れば」の元の形で兼て又此部落に属する人々が土を懷しがつた大きな動機の一つであらう。

「浜千鳥」の歌は、『大和物語』、『大鏡』等に記載の、「河尻」の「浮かれ女」の詠。この歌は、「貴人の遊を迎へ」ることともなつた「海部千年の寂しい歴史」を象徴する、と柳田は言う。

柳田が挙げた、中国「広東の珠江」の「蜑民」の例は事実としても確認できる。

広州市の珠江沿いに発達した賑かな大通り——チャンテイ長堤の一带はこのほか渡船が多く、所せましとばかりに

岸にならんだ船からは、蛋婦が絶えずやさしい声で、「喂到嶺南!」「過海呵!」「先生、到培英呵!」などと客によびかけたものであるが、これは広州の名物として、旅行者がなつかしく語る光景である。

渡船は大体が昼間の副業であつて、夜になると派手に着飾り、船に灯火をつけて群集し、遊客を待った。

これが、かつての中国に見られた水上の歡樂境——夜市であつた。

蛋民の女達の中に、かつて生活の窮乏に迫られ、あるいは甘んじて売春を業とするものがあつたのは、事實である。夜の長に客を引く女を野鷄ヤチとよび、小舟の娼妓を水鷄スイカイと称したが、いずれも蛋家の出身であつた。

(羽原又吉『漂海民』)

日本で海女が遊女ともなつた例は、志摩の「はしりがね」が著名である。「昔まだ汽船が現れず諸国の海上運送には何百石何千石の積量を収載する帆船が唯一の機関であつた頃にはいづれの小港も相当の繁昌をしたがそれに伴つて船人達を慰める遊女の数も少くなかつた」。「志摩の国にも鳥羽をはじめ諸所の小港に以前は女郎がゐて之をハシリガネの総称を以て呼んでゐた。志摩の小港は安乗あのり。的矢まとや。渡鹿野わたかの。三箇所さんかしよ。浜島はまじま。小浜おはまであつてこれらの港にもまたそれぞれの異つた呼名があつた。女達は沖の入船を待つて小舟で沖へ出かけて行つた」(岩田準一『志摩のはしりかね』)。これらは、志摩周辺の海女が遊女となつて出ていたのである。

けだし、「漁季以外の漁村の人々は、空いた手を他に動員する機会が多かつた」。民俗学者瀬川清子は、「愛知県日間賀島は、女子青年団の団員百二三十人中、半数は、女中・女工・女給、ゲームとりに出でゐると云ふ事である。女工以前にも、何らかの形で日雇、出稼ぎする必要があつた」という報告(「海村婦人の労働」を、柳田国男編の『海村生活の研究』に寄せている。恐らく、かかる背景が海女に遊女への道を歩ませたものであつたら

う。

それだけでなく、「健康ではちきれそうな裸の海人の娘」は海道に行く旅人達の目には魅力的に映ったことであらう。水心あれば魚心。海女と遊女との区別など、紙一重のことであつたか知れない。

我々はまた、遊女が海女を僭称して男を誘つたであろう例を『萬葉集』に探ることができる。すなわち、「遊_二於松浦河_一序」及びその歌。

遊_二於松浦河_一序

余以下暫往_二松浦之泉_一逍遙、聊臨_二玉嶋之潭_一遊覽上、忽值_二釣_レ魚女子等_一也。花容無_レ双、光儀無_レ匹。開_二柳葉於眉中_一、發_二桃花於頰上_一。意氣凌_レ雲、風流絶_レ世。僕問曰、誰郷、誰家兒等。若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰、兒等者漁夫之舎兒、草菴之微者。無_レ郷無_レ家、何足_二称_レ云_一、唯性便_レ水、復心樂_レ山。或臨_二洛浦_一、而徒羨_二王魚_一、乍臥_二巫峡_一、以空望_二烟霞_一。今以下邂逅相_二遇貴客_一、不_レ勝_二感応_一、輒陳_二款曲_一。而今而後、豈可_レ非_二偕老_一哉。下官対曰、唯々、敬奉_二芳命_一。干_レ時、日落_二山西_一、驪馬將_レ去。遂申_二懷抱_一、因贈_二詠歌_一曰、

あさりする海人の子どもと人は言へど見るに知らえぬうまの子と（以下略）

（『萬葉集』卷第五 八五三）

これについて、中山太郎『売笑三千年史』は次のように言う。

筑前の国司としての憶良は当代でのハイカラであつた。それにしては此の序文は如何にも支那直輸入の漢文で、頗る誇張に過ぎてゐると共に甚だ生硬なるものであるが、然しながらこの海士乙女達がタゞの女性で

ないことは花蓉無双とか、風流絶世とかいふ文字からも窺はれる。それに乙女達の挨拶として乍臥巫峡とか、豈可非階老哉とかいふ淫猥の語を平気で口にするところから推すと、愈々以てタゞの婦人でないことが知られるのである。由來、この松浦の玉島は、古く神功皇后が征韓の折に戦争の勝敗を占ふために、祈ひ釣をした由縁ある靈地で、爾來、こゝでは女性には魚は釣れるが男子には決して釣れぬといはれるたのである。かゝる來歴ある場所で魚を採る海士乙女達は、既に尋常の婦人でないのである。殊に彼女達の報ひた他の歌の中に『松浦河七瀬の淀はよどむとも吾れはよどまず君を以待たむ』とあるやうな態度は、全く世馴れ人馴れた媚を送り笑を売る女性に応しいものがある。加ふるに水辺は娼婦の活動するに便利の地であり、旁々、この乙女等は佐川媛の流れを汲んだ小くしてや、賤しい小夜姫の類であつたに相違ない。

舞台は肥前「松浦川」、釣るものは「若鮎」だけれども、「かゝる來歴ある場所で魚を採る海士乙女達は、既に尋常の婦人ではない」。⁽⁶⁾

北小路健『遊女 その歴史と哀歎』もまた言う。

「遊於松浦河序」の中で、憶良は次のように述べている。

「余以下暫往松浦之界逍遙上。聊臨玉島之潭遊覽。忽值釣魚女子等也。花容無双、光儀無比。開柳葉於眉中、発桃花於頬上。意気凌雲、風流絶世」

憶良の美文によつて形容された「海士の子」たちは、いわゆる単なる漁師の子ではあり得ない。「無郷無家」取るに足らぬ女にすぎぬと受け答えしながら「今以邂逅相遇貴客。不勝感応」と語をついで、

みごと憶良と贈答の歌をかわす才能を持っていたのである。

北九州の海港は、朝鮮半島と支那大陸に向って開かれていた門戸であった。そこには、新しい文物が輸入され、多くの人間が集合して、きわだった活気を呈していた。遊行女婦にとって、この海港は、働き甲斐のある場所であつたにちがいない。

ただ、これらの「海士乙女達」が、いかに「世馴れ人馴れ」ているにしても「笑を売る女性」であつたという確証はもとよりあるはずも無い。また、これらの女性が「遊行女婦」であつたとして、それが海女出身であつたという証拠もまた無い。けれども「おそらく貴族たちは、健康ではちきれそうな裸の海人の娘に、好奇的な欲情をおぼえたのであらう」こと、そしてそれが「旅のつれづれをなぐさめる恋愛遊び」であつたろうことが、ここでも確認できるとすれば、本論としてはそれで十分であらう。

そしてさらに、ここで注目すべきは、そもそも、八七段が冒頭に引いた、

葦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさ、ず来にけり

の「原歌」とされる「万葉集にある歌」、「万葉集三（二七八）石川少郎「志賀の海人は藻刈り塩やき暇無み櫛笥の小櫛取りも見なくに」に、「そちらは、上代、海港として栄えていた筑前国志賀島に、遊行婦として酒客の席に侍っていた女の謡った歌である」という指摘（窪田空穂『伊勢物語評釈』）がある点である。

最初に、古歌を挙げて、それを詠んだ地が即ちここだと誇っているのは、ほほ笑ましい。これは万葉集にある歌を原歌としたもので、そちらは、上代、海港として栄えていた筑前国志賀島に、遊行婦として酒客の席に侍っていた女の謡った歌である。面白いので広く拡がり、土地土地で、その土地に合うように謡い替え

られていた歌の一首である。

「葦の屋の」の歌の「原歌」は、遊女の歌ったものだと言うのである。

この説は、橘守部『萬葉集檜婦手』に溯る。

○石川女郎 今本に、少郎とある少は、女の誤也。左註に、「右今案 石川朝臣君子号^ヲ曰^ク「少郎子」也」とあるは、目録に、石川女郎^{本古名}曰^ク「君子」と記したるより、後の人のしわざ也。今此の目録と歌と端書とに据て考るに、既に別記に弁へたる如く、此の人は遊行女婦にて、此の歌詠めりし頃は、筑紫^ノ国志加に在し故に、自らを然^{シカ}之海人^ノといひなしつる也。是出生の地なりけらし。さて女郎とかき、君子と云へる、遊行女婦のしるし也。女郎は今におきて遊女を云ふ。君子は江口の君、神崎の君、など中昔迄も専ら云へり。さて後に京へ出て、多くの男に逢へる事は、一卷の其出たる処々に弁へつ。

八七段冒頭に引かれた歌の「原歌」の作者は「遊行女婦」であり、「此歌よめりし頃は、筑紫^ノ国志加に在し故に、自らを然^{シカ}之海人^ノといひなしつる」と言う。果してその作者名を「石川女郎」と認定し得るか否かは、『萬葉集』本文批判上の問題があつて速断は憚られるけれども、この「原歌」の作者が「遊行女婦」すなわち遊女と考え得る⁽⁷⁾ということは、『伊勢物語』の理解の点からすれば示唆的であると言ふべきであらう。

平安朝も末期になると、すでに葦屋も「相当の繁昌をした」港であつた。『本朝無題詩』には、その殷賑の様が描かれている。

著「葦屋津」有^レ感

釈蓮禪

沙月渚風秋皓々

自然遊子感吞^レ胸

問津上下客舟集

分岸東南民戸重

土俗毎朝先売菜

釣魚終夜幾焼松

不図再別於斯地

思旧瀾干淚忽降

「釣魚終夜幾焼松」は、『伊勢物語』「海人の漁火多く見ゆるに」に通うであろう。とすれば、「問津上下客舟集」も『伊勢物語』の時代にまで遡り得るかも知れない。そこに、「それに伴つて船人達を慰める遊女の数も少なくなかつた」という（『志摩のはしりかね』）状況が無かつたかどうか。もしあつたとすれば、その「遊女」の有力候補に、海女を擬することもあながち無謀な想定ではないだろう。海女が遊女であるならば、海女が気の利いた歌を詠むのも不思議ではない。

また、守部によれば、八七段冒頭に引かれた歌の「原歌」の「一首の意は、志加の海人は、葦布アサフを苅るの、塩を焼くのと、此頃は世のことわざに取紛れて俄なる今日の御召しに、黄楊の小櫛だにも得さ、ずまゐりたりと云なり」と言う。とすれば、少くとも八七段に引かれた歌も、「俄なる今日の御召し」に答えようとした海女の氣持を詠んだ歌だったということになる。

そうした海女のいる所として紹介された「葦屋のさと」へ、八七段の男達は出向いたのである。

いずれにしても、旅先は人を解放する。まして海辺の解放感は一汐のこと。しかもそれが、夏ということであれば、それはなおさらだったかも知れない。

八七段の季節も、恐らくその、夏であつた。

連歌寄合の書である『竹馬抄』、「夏之部」「五月之詞」には、

一海松 句作 みるめ拾ふ みるめ刈干 ひろふみるふさ

△付合^ニ 磯辺 浜伝ひ よる浪 みつしほ しける芦 うき藻

芦屋 南風 真砂地 難波 大淀浦 伊勢海 あまのつりふね

とある。「みるめ拾ふ」、「芦屋」、「南風」とは、『伊勢物語』八七段に拠るものである。八七段の男達の海浜の「遊び歩き」、「布引の滝見」は、恐らく夏の行楽であつた。

藤原定家はまた、八七段を踏まえて次のようにも詠じている。

この頃は南の風に浮海松のよるく涼し葦の屋のさと
(『拾遺愚草員外』四季題百首)

「四季題」は「海」、これはその夏歌である。

下句「よるく涼し葦の屋のさと」ということからすれば、「葦屋のさと」にはまた、「涼し」さが期待されたことが窺われる。すなわち、葦屋は暑さを避ける避暑地であり、そこでの「遊び歩き」は暑さを凌ぐ「納涼」(『倭漢朗詠集』夏)の業であつたのであろう。

藤本孝一「平安京周辺の別業」(『平安京提要』所収)は、「別業はいかなる状況のもとに造作されたのであるか」という問いに對して、

イ、遊獵における休息所的な施設から転用された。

ロ、距離的にそれほど遠くないところにある。

ハ、主要幹線に沿つたところに造営された。

二、避暑地の別荘として造られた。

ホ、隠居的な性格を持つ。

ヘ、領地のなかに造られた。

等の答えを列挙している。

八七段「葦屋のさとしるよしゝて」が、「領所あるによりて」ということであれば、そこに構えられた男の「家」とは、「領地のなかに造られた」、「避暑地の別荘」であつたと考えられるであろう。同じく八七段「宮内卿もちよしが家」も同様の別荘であつたであろう。また、初段「春日のさとしるよしゝて」の方は、「遊獵における休息的な施設から転用された」「別業」という方向で考えるべきであろう。

いずれにせよ、八七段の男は、京の暑苦しさを葦屋に避けて、「遊び歩き」にうち興じたのであつた。そこで「いわゆる現地妻」も、その延長であつたと考えられる。「遊女」を和語に翻じて、「あそび」。それが遊女であつたにせよ、なかつたにせよ、その「現地妻」も本質的には「あそび」の一環であつたのであろう。いずれにしても、それは避暑地の出来事。所詮、リゾートの恋は、「あそび」以上のものではなかつたと見るべきである。

七

八七段の男の「いわゆる現地妻」のものと思われる歌は、「田舎人の歌にては、余れりや、足らずや」とされながら、採るに足るものとされたのであろう、八七段の掉尾を飾ることとなった。

その夜、南の風吹きて、浪いと高し。つとめて、その家のめのこども出で、浮海松の浪に寄せられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。女方より、その海松を高坏に盛りて、柏を覆ひて出したる、柏に書けり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり

田舎人の歌にては、余れりや、足らずや。

この歌について、片桐洋一『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』は次のように解説する。

平安時代の人は、ことのほかに海藻を好んで食した。第七十六段で引用した第三段の文章では命がけで恋している女にひじきを贈っている。現在では考えられぬことである。京都に生活している彼らにとつては海産物は貴重なものだったにちがいない。その貴重な海藻のまことに新鮮なもの、海から拾い上げたばかりのものを賞味したと記すのがまずこの部分の眼目である。観光雑誌・旅行雑誌にあるその土地のうまい物紹介のようなものである。

ところで、その供し方が普通ではなかった、実に教養とセンスがあつたと言っているのである。まず、「みる」という海藻は「海松」（『倭名抄』）と書く。「松」は常緑樹、永遠なるものを象徴するのである。仙人は松の実・松の葉を食して不老長寿を保つというほどである。「海松」も当然不老長寿のシンボルでなければならぬ。それを海神が髪にさす不老長寿のシンボルと見立てたのである。植物を「かざし」にするのはその植物の持つ生命力を体につけて長寿を願う呪術なのである。それに柏もまた不老長寿のシンボルであつた。海松の上にさらに柏を置いたわけである。客人の不老長寿をそれほどまでにことほいでくれたというわけである。

それにしても、「君がためにはをしまざりけり」というのは少しひつかかる。この歌、本来は自分の愛する人のために海松を供する時の歌であつたのを、ここに利用して客人に対して詠んだ歌のように物語を作つたのであらう。

「それにしても、「君がためにはをしまざりけり」というのは少しひつかかる」。

この直感に正しかつたのではないか。やはり「この歌、本来は自分の愛する人のために海松を供する時の歌であつた」と見るべきなのではないか。この歌が、男の「いわゆる現地妻」のものであつたと見るとき、この見方はますますそれにふさわしい。

この「いわゆる現地妻」は、「客人に対して」などではなく、「愛する人のために海松を供」したと、額面通りに受け取るべきであらう。そもそも、食物を供することは愛情表現の第一歩である。

けれども、いかにそれが「貴重な海藻のまことに新鮮なもの」であつたにしても、所詮それは「海から拾ひ上げ」てきたものでしかない。その供し方と、それに添えられた歌こそが、「現地妻」の次の腕の見せどころであつた。

まず、その海松は「わたつみのかざしにさすといはふ藻」と歌われた。海松は「海神が髪にさす不老長寿のシンボルと見立て」られたのである。確かに「植物を「かざし」にするのはその植物の持つ生命力を体につけて長寿を願う」もののなのであらう。

海松を「かざし」に挿した実例は、『貞丈雑記』に見出すことができる。

一女の元服を髪削ぎと云ふ也。（中略）其祝の様、打みだりの箱に山菅海松一ふさ山橘やぶかうじの事也事也小き青目石二

櫛一具の事挟み一丁引合の紙一帖入れて持出置く。女子は基盤の上に立て居られ候を後へ廻り、髪 of 肩の通りに山菅海松山橘青目石を結び付けて青目石は紙に包付る櫛を取て髪 of 先を三度かきながら、ちひろも、ひろと三度唱へて挟みを取りて髪 of 先を少挟みて、扱髪 of 髪をも削ぎて山菅以下結び付けたる物を解きて、それに挟みたる髪を添へ、一つに引合の紙に包みて川へ流す也。(中略)

山菅を用る事は、山菅はよく茂りて冬も雪霜にいたまざる物故、それにあやかり髪 of 長く茂る為也。海松も水中にてはびこり茂る物也。山菅も海松も色青し。髪 of 艶よきは青く光る故、青色にもあやかる為也。

『源氏物語』葵の巻、紫の上の髪を削ぐ光源氏の詠にも、

はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む

とあった。この「海松ぶさ」を、『河海抄』は「髪削ぎの具足に海松を用也」と注し、現代の諸注は「黒髪 of 房々したさまを形容する」(『新潮日本古典集成』)と解するが、これはいずれ、『貞丈雑記』に紹介されたような髪飾りとしての海松 of 因みで、そう詠まれたものと解すべきであろう。

海松は「かざし」であった。それをここでは、「君がためには惜しまざりけり」と詠む。髪 of 飾りとしての海松も、男 of ためには惜し気も無く差し出そう、と言うのである。

「かざし」、すなわち「髪挿し」「簪」を「自分の愛する人 of ために」差し出す、とはどういうことであろうか。ここで参照すべきは、同じく髪に挿して女性 of 美しさに色を添えた、櫛についての考え方であろう。

櫛は本来、女性 of 象徴と考えられてきた。(中略)

贈られた櫛を持つということとは、その女性とともにあるということであり、その櫛を手放すということは、すなわち別れを意味したのである。いずれの例も、櫛が愛する男性、パートナーたる男性との関わりの中で登場し、その女性の思い、魂や存在全体の象徴として重要な役割を担っていることが窺える。

（沖本幸子『今様の時代 変容する宮廷芸能』）

「贈られた櫛を持つ」ということは、その女性とともにあるということであるとするならば、「かざし」を男に贈ることも、同工異曲。ここで「現地妻」が、「かざしにさす」べき海松を「君がためには惜しまざりけり」として、男に差し出したことも、「愛する男性、パートナーたる男性との関わりの中で登場し、その女性の思い、魂や存在全体の象徴として重要な役割を担っている」とものと解すべきであろう。

髪飾りとして我身の分身とも言うべき海松、それも「君がためには」惜しくはない、として「現地妻」はその海松を、男に差し出した。それもまた一の愛情の表現だったはずである。

そもそも和歌の世界では、「みる（め）」は「見る目」でもあった。

例えば、『伊勢物語』七五段。

昔、男ありけり。逢はじとも言はざりける女の、さすがなりけるがもとに言ひやりける、

秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで寝る夜ぞひぢまさりける

色好みなる女、返し、

みるめなき我が身を浦と知らねばやかれなで海人の足たゆく来る

昔、男、狩の使より帰り来けるに、大淀の渡りに宿りて、斎宮の童べに言ひかけ、る、

みるめ刈るかたやいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣舟

(七〇段)

「みるめ」は、恋しい人を「見る目」。それを捧げるということは、従つて「自分の愛する人のために」、交会の機会を与えようという寓意を含むものではなかつたか。

一〇四段では、「みる」「め」を「食ふ」とは、まさに男女の交会の意を詠んだものであつた。

昔、ことなる事なくて尼になれる人ありけり。かたちをやつしたれど、物やゆかしかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌詠みてやる。

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも頼まる、かな

これは、斎宮の物見給ひける車に、かく聞こえたりければ、見さして帰り給ひにけりとなむ。

(一〇四段)

一〇四段を参看することによつて、海松を供する八七段の女の趣向は、「めくはせよ」という男の側の要望に自発的に応えようとするを、それとなく示そうとしたものであつたと解釈することが可能になつて来る。⁽⁸⁾海松を供する「わたつみの」の歌には、「かざしにさすといはふ藻」とだけ言われて、「みる」は詠まれてはいない。それをあえて隠して実物で示して見せたのは、海松に「見る目」を懸けて示そうとした、謎だつたのではないだろうか。

それはいずれにもせよ、「わたつみのかざしにさすといはふ藻」を差し出すところに結果的に強調されること

になるのは、髪飾りを取った、女の姿であろう。

髪飾りたる海松を差し出す、ということは、女は髪飾りを付けていない。そこに浮かび上がるのは、恐らく海女でもあった「現地妻」の、飾り気の無い黒髪であったのではなからうか。

「おそらく貴族たちは、健康ではちきれそうな裸の海人の娘に、好奇的な欲情をおぼえたのであらう」という、貴族の関心は、この場合、その素朴な黒髪の美しさに向けられたのではないだろうか。それがしつとりと濡れた黒髪であつたにせよ、さらさらと浜風にそよぐ黒髪であつたにせよ、それは都の女性達の髪とは、また自ら違つた魅力を醸し出すものであつたであらう。

海松を男に捧げる、

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり

という歌の背後には、いかにも海浜の女性にふさわしい、素朴な髪をした「現地妻」の姿が髣髴としてくる。

そして、その姿は八七段冒頭に引かれた、

葦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさゝず来にけり

の歌に詠まれた、「黄楊の小櫛もさゝず来にけり」という「塩焼き」の海女の姿とはるかに呼応することとなる。

この「塩焼き」の海女は、挿すべき櫛を挿していなかった。「世のことわざに取紛れて俄なる今日の御召しに、黄楊の小櫛だにも得さゝずまゐりたり」。この海女は、男の元へ取るものも取りあえず、恐らく長い髪を靡かせて駆けつけて来たのであつた。その飾り気の無い、素朴な美しさ。それは、都の貴族の関心をそそるものであつ

たに違いない。

かくて八七段冒頭、物語の舞台「葦屋のさと」の紹介として引かれたこの歌は、同時に八七段自体の展開をもつて暗示するものであったことが知られよう。

「黄楊の小櫛もさ、ず来にけり」という「健康ではちきれそうな裸の海人の娘」のいる葦屋、その地へ赴いて、男は「わたつみのかざしにさすといはふ藻も」髪に挿さぬ「現地妻」との交会を楽しんだのであった。かくて八七段は、海女の素朴な美しさを描くことにおいて、首尾一貫することとなる。

そして、私見によれば、海女はしばしば遊女、すなわち「あそび」であった。「海のほとりに遊び歩いて」と海浜の行楽を綴った八七段は、従つてこの点においても、「あそび」を描いた段であつたということになる。

(了)

注

- (1) 京都に住んで山ばかり見ている平安人士にとっては、海は憧憬的であつた。京都から最も近距離にある海は、大阪湾である。故に平安人士は、淀川を下つて難波の海を見ることを唯一の楽しみとした。(中略) 故に平安時代には、難波潟・墨江の海浜風景を賞するための住吉大社詣が盛んに行なわれた。(中略) この遊山気分たっぷりの平安人士の住吉詣に情趣を添えたものが、江口の河曲における遊女の群参であつた。

(瀧川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女——江口・神崎の遊里——』)

住吉出遊を語る『伊勢物語』六八段・一一七段等にも、こうした状況を考えるべきであろう(拙稿「伊勢物語の

あそび」『文学 季刊』第一〇巻第四号参照）。

また、「江口の河曲における遊女の群参」のみならず、住吉大社の周辺にも遊女のあったことが推察される。
『梁塵秘抄』に、

住吉四所の御前には 顔よき女体ぞおはします 男は誰ぞと尋ねれば 松が崎なる好き男
とある。

これについて、上田設夫『梁塵秘抄全注釈』は、「女体」は女身のことと一般に女神のことをさすから、ここは住吉四所の一座である息長帯姫命（神功皇后）を表面的にはいつている。しかし裏面では住吉神社に仕える巫女か、それから転じた遊女が存在をうたっているものと考えられる。これを女神のていにみなしている」と言う。

（2）中谷孝雄の小説『業平系図』には、業平が「蘆屋の領地」の「彼の別荘」の「身のまはりの世話をさせる女たちの」「一人とかなり深い交渉を持った」という話が綴られている。

水無瀬での一日は、業平に忘れ難い印象を残したらしく、その後、彼はとかく都の外——山河園田の境に心を誘はれがちになった。しかし宮仕があるので、さう気ままに行楽も許されなかつたが、たまたま初夏の頃しばらくの休暇が得られたので、久しぶりに——殆んど十年ぶりに蘆屋の領地へ行つて見ることにした。古い歌に、

あしの屋の灘の塩焼いとまなみ

黄楊の小櫛もささず来にけり

といふのがあるが、その灘（海）に臨んだ小高い松林の丘に、彼の別荘はあつた。前以つて領地の監理人へ使者を出しておいたので、行つて見ると家によく手入れが行届き、身のまはりの世話をさせる女たちにも事欠かないやうに周旋されてゐた。

この前来た時、業平はさういふ女たちの一人とかなり深い交渉を持った。しかし海辺の恋ははかなく、やがて業平が都へ帰る日が近づくと、女はもう二度と彼に逢へないやうな気がするのか、見る目も気の毒なほどに打萎れてゐた。業平は、

あしべより満ちくる潮のいやましに

君に心を思ひ増すかな

と慰めた。事実、別れは彼にも辛く、その日が近づくに従つて彼はいよいよその女を愛しく思ふやうになつてゐたのだつた。

(3)

近世の浮世絵等には、海女を画題とするものも少くないが、これらもかかる関心に出るものであつたであらう。

(4)

『源氏物語』の夕顔も、この歌を口にする。

「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。

(夕顔)

これについて、原岡文子「遊女・巫女・夕顔——夕顔の巻をめぐつて——」(『源氏物語 両義の糸 人物・表現をめぐつて』)は、「さて、「海人の子」とは何か。宿も定めぬ漂泊の中に世(夜)を過ごすものとしての遊女のイメージが浮かび上がるのは偶然ではない。「白波の寄する渚に……」の歌は、『和漢朗詠集』「遊女」の項に収められたものだった」と言う。

なお、「夕顔の中の無意識な娼婦性」は、夙く円地文子『源氏物語私見』に指摘がある。

(5)

遊女の歌うことも多かった歌謡には、海女や海女の風情を歌うものも少くない。

我が子は十余になりぬらん 巫してこそ歩くなれ 田子の浦に汐踏むと いかにか海士人集ふらん まさしとて 問ひみ問はずみ廻らん いとほしや

汐汲ませ 網引かせ 松の葉搔かせて 憂き三保が洲崎や 波のよるひる

（『梁塵秘抄』巻第二）

刈らでも運ぶ浜川の 潮海かけて流れ葦の 世を渡る業なれば 心なしとも言ひ難し あまのの里に
帰らん 〳

棹の歌 歌ふ憂き世の一節を 〳 夕波千鳥声添へて 女呼びかはす海士乙女 恨みぞまざる室君の行
く舟や慕ふらん 朝妻舟とやらんは それは近江の海なれや 我も尋ね〳て 恋しき人に近江の 海山も隔
たるや 味気なや浮舟の 棹の歌を歌はん 水馴れ棹の歌歌はん

（『閑吟集』）

『梁塵秘抄』の「巫」は、「神に仕え、神楽を奏して神意を慰め、また神意を伺つて神降ろしをおこなったりする人。村々を回る歩き巫には娼をかねる者もあった」と言う（上田設夫『梁塵秘抄全注釈』）。

（6）中山氏は「遊於松浦河序」について、「此の序文は如何にも支那直輸入の漢文で、頗る誇張に過ぎてゐると共に甚だ生硬なるものである」としているが、それもそのはずで、この序については『遊仙窟』の表現の影響が指摘されている。

しかも、同氏が「この海士乙女達がタゞの女性でない」と言い、「愈々以てタゞの婦人でないことが知られる」と言う、「花蓉無双」「風流絶世」、「乍臥巫峡」、「豈可非偕老哉」等の語句については、「支那小説たる遊仙窟」との「類似は」「辞句上に於て更に甚しいものを発見する」（近藤春雄「遊仙窟と萬葉集卷五遊於松浦河序」『学苑』）

第三卷第七号)と言う。近藤氏はこれらの語句に對して、「華容婀娜天上無儔」「天上無双人」、「歷訪風流」「自隱風流至」、「巫峽仙雲」、「穀則異室 死側同穴」等の『遊仙窟』の語句を示して、「以上を要するにかくまでも遊仙窟と遊於松浦河序との内容形式上に於ける類似あるに於ては之を以て單なる暗合とは考へられず、寧ろ剽窃になるとさへ考へられるのである。されば今や吾人はこの遊於松浦河序が遊仙窟によつて指導啓發されてゐる事を斷言するも最早や憶斷なりのそしりは免れるであらう」としている。

しからばこれらの語は『遊仙窟』の語を借り用いた文飾であり、「遊於松浦河序」は『遊仙窟』の文言上の剽窃に過ぎないか、と言うと必ずしもそうではない。なぜなら、當の『遊仙窟』自体にも、「遊仙窟」は妓女の生活を寫したものであり、「遊里の体験を生かして、桃源郷裡の物語として描いたもの」(八木沢元『遊仙窟全講』)であるという説があるからである。「遊於松浦河序」は『遊仙窟』の文言を利用することで、期せずしてその「妓女の生活を寫したもの」という性格を濃厚に示すことになった、と言ひ得るであらう。

(7) 守部はこの「石川女郎」を、『萬葉集』中、別に現われる、「石川女郎」、「石川郎女」等と同一人物であると同定して、多くの男の相手となつてゐることをもつて、この人物が「遊行女婦」であつたことの証ともしてゐる。

此にあやしういふかしきは石川女郎なりけり。二十に、久米禪師と詠み交して、遇ひもしたり。また三十三皇子と遇へり。また三十三大津皇子と接る事を、津守連通に令せて占ひ露はせる事あり。また四十四日並知皇子ノ尊、忝くも御歌賜はす事あり。其端書の下に、女部字曰「とあり。凡てかく分註に女子の名を記せるものは皆遊行女婦也。(中略)

かくて三卷^二今本に、石川ノ少郎歌「然之海人者^{シカノアマハ} 葦布^メ茹塩^{カリシホヤキ}焼^{イトマナミ} 無暇^ツ 髮梳^ゲ乃少櫛^{ザノヨグシモ} 取毛^{トリモ}不見^ミ久爾^{ナクニ}」^{左注}「右今案石川ノ朝臣君子号曰^二少郎子^一也」とあり。先此名、校齋本には、石川白水郎歌とありて左注なく、歌の下

に、石川泉郎字曰「君子」とあり。由阿本は、左注、石川ノ朝臣を作「泉郎」而下八字なし。此外も異同あれど得るさず。さて此うた、似閑が引る紀氏萬葉抄には、しかの遊君石川女郎「しかのあまはめかり塩やきいとまなみつげのをぐしもとらず来にけり」とあり。か、れば、石川ノ女郎は、はじめ、筑前ノ国糟屋郡志加ノ里の遊行女婦なりけるが、すぐれて名高くなりて、都にめされて出しにぞありける。

（『萬葉集檜婦手』）

これに関連して、扇畑忠雄「遊行女婦と娘子群」（『萬葉集大成 作家研究篇下』）は、

たとへば郎女中、随一のコケツト石川郎女を遊行女婦であらうといふ説などは、彼女の娼態だけをとりあげて爲した説であつて。石川郎女その人は当時の名門の出である。しかし、彼女が男まさりであり、美貌と才幹とを以て数人の男性と相聞し、その機智をはこつてゐる所は、遊行女婦的なものに一脈通ふもののあることを否めない。

と言う。

（8）「海松を高坏に盛りて、柏を覆ひて出だしたる」というのが、女の趣向であつた。柏の葉には、「わたつみの」の歌が書かれていた。柏の葉に歌を書くことは、例えば『大和物語』一六八段等に「みな人は」の歌を「柏に書きたる」という、僧正遍昭に例がある。しかしそれは、「簀一つをうち着て、世間世界を行ひ歩き」という事情によるもの。八七段の場合は、「自分の愛する人のために海松を供する時の歌であつた」。海松の塊りのことさら柏の葉で覆い隠して供した趣向には、それ故の意味深長な含意も籠められていたものと思われるが、最早ここにこれ以上の詮索することは野暮に属するであらう。

付記 本稿は前稿「葦屋のさとしるよし、て——伊勢物語のあそび——」（本誌第三十一輯）に続く。また本稿成るに

当っては、平成二十一年度、成城大学より特別研究助成を受けた旨、あわせて付記する。